

東南アジアは形成されたのか？ それはどんな世界か？

立 本 成 文

「東南アジアは形成されたのか？それはどんな世界か？」ということを中心に、ひとつは我々が何を「東南アジア」と言っているのかという点、ふたつはその「東南アジア」とは何を考えているのか、みっつは他律的・自律的な枠組み、あるいはミクロとマクロの問題のような方法論に付いてコメントをしたいと思う。

「東南アジア」という枠組を考えると非常に簡単に言えば、私は「空間」と「人」と「システム」という、三つのレベルを一応区別すべきだと思う。「空間」というのは「人」も入れた生態空間であり、ブローデルで言えば環境の役割、あるいは構造である。「人」というのはエスニシティというくり方が一番分かりやすい。要するに「人」の種類でもって区切ると言うことである。今日の話は空間といった基盤的な面は全く出てこないで、むしろ人々が作る「システム」で捉えられている。言い換えれば、国家や利益集団、地域連合という面だけで「東南アジア」という枠組みを考えようとしているという事である。この点をまず第一に確認しておきたい。構造はブローデルによれば長期的な歴史だが、ある意味では超歴史的な意味での空間構造というものを議論するのではなく、集団とか全体現象というシステムとしての東南アジアを論議していると言える。システムについては、山影さんの地域統合の論文——『対立と共存の国家理論——国民国家体系のゆくえ』東京大学出版会(1994)——が我々の指針となるだろう。それを非常に簡略化して言えば、「共同体」と「経済」と「安全」となる。地域統合が共同体を目指すのか、経済を目指すのか、安全を目指すのかというシステムの軸でできるのが、交易圏的地域統合であったり、防衛圏であったり、あるいは共同文化、共同市場、共同防衛、あるいはそのミックスであったりするのだろう。具体的には国家やエスニシティ、宗教・利害集団、地域機構というレベルの話での「東南アジア」が語られたと考えている。

そういうレベルで考えた時に、「東南アジア」を一つにまとめるのは何かというと、私自身は市場原理によるネットワークであり、島嶼的・海域世界と考えている。地域統合ではなくて地域結合、地域集合体と言えるだろう。このような考えに立てば、東南アジアという空間の上で常に括弧付きの「東南アジア」を我々は構築しては壊し、再構築しつつある。今日の発表で言えば、日本もイギリスも、このファジーシステムを十分崩せなかったし、もっと遡れば、中国もインドも崩せなかったのではないかというのが、我々の長期的な東南アジアに対する見方である。

もう一つ今日の報告で出てきたのは、方法論であり、それぞれに新しい視点が盛り込まれた

力作であった。その一つ一つに尽きせぬ興味をそそられるのだが、二つだけ私の問題関心と併せて指摘しておきたい。

一つは他律的な枠組みと自律的な枠組みで、これはおそらく明日のセッションと今日のセッションの違いとなるだろう。今日のセッションは全体に植民地という他律的枠組みであり、明日は戦後の東南アジアという自律的な枠組みで議論されることとなるだろう。今日の話題の段階では自律的枠組みが出てくることはあまり期待しない。その理由は「東南アジア」を「システム」として考えることに対する私の偏見に基づいている。「システムのないシステム」が「東南アジア」である。もし自律的枠組みが出てくるというのであれば、山影さんの言葉を借りれば、共同体志向の考え方での捉え方だろう。むしろ緩やかなネットワーク的な枠組みであり、それは自律的に出てくるのではなく、かなり他律的に出さざるをえない。それが今日の討論では植民地圏ということであり、他律的枠組みにならざるをえないだろうという指摘に他ならない。

二つ目に、ミクロとマクロ、あるいは枠組みの必要性という点で、ミクロを積み重ねればマクロに到達するのかという疑問が一つにある。もう一つは一度大きなマクロの枠組みの中でミクロを考える必要性で、その時にはなぜマクロの枠組みが必要なのかということが気になる。今日の発表は地域連関を意識的に取り上げた研究であったが、その積み重ねからネットワーク的東南アジアが明らかになるのかという私の疑問に対しては、必ずしも明らかな解答はなかったように思う。では東南アジアとはどう考えればいいのかという、それに対する答には、それぞれに色々なイマジネーションがありうる。そしてそれはとりもおさず東南アジアというマクロの枠組みの必要性に疑問を投げかけることになる。例えば国際関係論というディシプリンの中に、なぜ地域連関と言い、その地域という単位が必要なのかという一つわかってこない。例えば、今日の地域連関というのは、経済史で使われる域間交易、域内交易というものであり、その時に域内とするのか、地域間とするのかという問題もあるが、国際関係論を特に考究していくときに、東南アジアというマクロの枠組みというのは必ずしも必要ではない。それに関わらず、東南アジアを語る理由は何なのかなという疑問を抱いている。

そういうことを考える上で、今日の三つの発表で特に私が興味深かったのは、イギリスの地域的アプローチであった。大東亜共和圏について質問したのは、総弁務官を設置するにあたって、大東亜共栄圏への意識がイギリスの中であったのかということが知りたかったからだ。大東亜共栄圏や、総弁務官による東南アジアというものが、1940年代以降ずっと出ているのであれば、外からの地域認識として「東南アジアは一つである」という認識が出てきていると言え

る。そうすると植民地圏はどのように考えればいいのかという大きな問題が出てくる。結局、今日のようなアプローチであれば、必ずしも「東南アジア」という枠組みは要らないのではないか。東南アジアで起きた事象をディシプリンで切るとするのは、必ずしも東南アジアについて研究するということと同じではない。

それともう一つ、山影さんの「安全・経済・共同体」という三つの軸で考えれば、交易は安全保障がなければ円滑に動かない。ところが東南アジア自体では植民地主義のように、暴力装置は常に外的システムとして入っている。暴力装置というのは国家の防衛と考えてもいいが、そういう装置をうまく使って一つの大きな共同体的地域をなしたのがソ連やアメリカだと考えれば、東南アジアにはあくまでも暴力装置はなく、一つの市場圏だけだという言い方もできる。暴力装置なしに安全が保障されるというこの地域は、どのように考えられるのかという疑問がある。